

鹿児島県立与論高等学校

校長通信

第3号 (令和6年8月22日/校長 大倉秀心)



校訓「好学 創造 親和 不屈」

鹿児島県大島郡与論町茶花1234番地1



電話 (0997) 97-2064

FAX (0997) 97-2844



インターンシップから働く意味を考える

7月23日(火)~26日(金)の4日間、2年1組の生徒たちが町内さまざまな事業所でインターンシップを行いました。ご多忙中にもかかわらず、生徒たちにとって大変貴重な経験を積ませていただいた受け入れ先の事業所の皆様に、この場をもって感謝申し上げます。ありがとうございました。

普段、学校で学習に励んでいる生徒の皆さんにとって、職場で仕事を体験するということは、それだけでも新鮮で新たな気づきもたくさんあったことと思います。「仕事の大変さや厳しさが分かった」という感想を持った人も多かったのではないのでしょうか。

また、本校は鹿児島県立の普通科では珍しく、比較的自由にアルバイトができる学校でもあり、「家計の負担を減らすため」「受験費用の足しにするため」「社会勉強のため」等の理由でアルバイトをする生徒が少なくありません。それらの理由は立派なもので、ここでとやかく言うつもりはありませんが、ここでは、「お金を得て働く」ということの意味をもっと深いレベルで考えてみたいと思います。

現在、高校でも金融教育が必修化され、皆さんも投資について学んでいます。しかし、「投資は賢くお金を増やすこと」という考えに警鐘を鳴らしている新聞記事があったので、まずはそれを紹介します。

「日本は米国に比べてお金の教育が遅れていると言われますが、遅れているのは投資の知識ではなく、なぜお金をもらえるかについての理解だと思っています。お金の本質について教わらず、アルバイトくらいしか経験がないと、『お金は自分の時間を売ることでもらえる』と思ってしまいます。

これに対して米国では、子供に家の前でレモネードを売る体験などをさせて、『どうすればみんなが喜んで買ってくれるか』から教育を始めます。『お金は人の役に立てばもらえる』ことを理解した米国の学生は、誰かの役に立つモノやサービスを生み出すために起業し、『投資される側』になろうと考えるようになります。

投資が経済を成長させ、社会をよくするのは、『投

資される側』にお金流れ、彼らが新たな挑戦をするからです。日本で『失われた30年』と言われている間にグーグルやアマゾンが世界的な企業に成長したのは、米国の人たちがたくさん投資したから、だけではありません。その投資マネーを受け取って、これまでにないモノやサービスを生み出そうとした人々がいたからです。」 (2024年6月23日読売新聞朝刊 作家・金融教育家 田内 学)

つまり働くとは、自分の時間を切り売りして、その対価としてお金をもらうことではなく、人の役に立つことをして初めてお金がもらえる行為ということです。例えばスーパーでアルバイトするにしても、「時給900円だから今日は4時間で3,600円」と金勘定をするだけで、与えられた仕事をマニュアル通りに時間内でただ消化するのではなく、どのように商品を陳列したらお客様に見やすいかとか、困っているお客様にどんな声かけをすれば気持ちよく買い物をしてもらえるか等を常に考えながら働くことで、お客様のそのお店に対するイメージは大きく変わります。それにより、店の売り上げも変わることでしょ。業種が変わっても同じことです。どんな仕事も、何らかの形で人の役に立っているという点は同じです。「どうすれば人の役に立つか」「どうすれば人に喜んでもらえるか」これを追求することが新たなモノやサービスを生み出し、その業界を成長させるのです。これから



オリンピックと部活動

応援と誹謗中傷

今(8月8日現在)、世間はオリンピックムード一色です。テレビでは日本人選手の活躍が連日報道され、4年に一度の祭典が盛り上がりを見せています。ただ、勝負事であるが故に、世間の期待通りにメダルを獲得した選手がいる一方、実力通りに試合運びができず、まさかの敗戦を経験する選手も出てくることになります。見ているこちらも日本人として歓喜したり落胆したりと、忙しく様々な感情に包まれることになります。でもそれが応援する側としては面白いのであって、メダルの色が何色であっても、又はメダルに手が届かなくても、最終的にオリンピックの舞台までたどり着くことができた選手たちには、「お疲れ様でした」という気持ちを私は贈ってあげたいと思う次第です。

同様に、普段から生徒の皆さんが部活動に励む姿を見ていて思うことがあります。どの部であっても、仲間と声を掛け合いながら、あるいはタブレットの画面を確認しながら個人で、それぞれ真剣な眼差しで練習している姿を見ると、思わず応援したくなります。競技力という点ではオリンピック選手と比べるまでもありませんが、自分のレベルを一段上げる努力をするという点では、オリンピック選手も与論高校生も違いはないわけです。本校吹奏楽部の皆さんが第69回鹿児島県吹奏楽コンクール(高等学校Bの部)で金賞を受賞し、南九州小編成吹奏楽コンテストの上位大会に出場することも、実にあっぱれなことです。コンクール当日、出張の関係でちょうど鹿児島市内にいた私は運良く本校吹奏楽部の演奏を観覧することができました。県最南端の島から最も時間を掛けて会場入りした部員一人一人が、背筋を伸ばして凛とした態度で演奏する姿を私は誇らしく思いました。

私はこれまで数多くの生徒を指導してきた中で分かったことがあります。それは、心の中に一点の曇りもなくただひたすらに努力している生徒の眼差しは本当に澄んでいてきれいだということです。表情も引き締まってきて幼稚さ・子供っぽさが消えてくる。この段階に達した生徒は驚くほど能力を伸ばします。そしてそれが不思議と学業の方にもつながっていくのです。

こう考えると、どの部活動で活動するにせよ大切なのは、それぞれ個人がそれぞれのレベルで「伸びよう! 伸びよう!」とする思いの強さだということになります。その思いは与論高校生であってもオリンピック選手並みに強く持つことはできるのです。そういう姿を周りは

応援したくなるし、その努力の結果であれば、結果がどうあれ、「よく頑張った。お疲れさん。」と言ってあげたくなるのです。

ところが今回のオリンピックでは、選手へのSNSによる誹謗中傷が問題になっています。実に残念で情けなく、怒りすら沸いてきます。オリンピックの舞台に立つまでにどれだけ挫折を繰り返し、人の見ていないところで並ならぬ努力をしてきたのかを想像すれば、一度の失敗や敗戦に対して、関係者ならともかく部外者が軽々しくネガティブな言葉を浴びせることはできないはずです。なのに、そういう言葉がなくなる。しかもSNS上で匿名で行われている。実にいやな世の中になったものです。「負けるな」「嘘をつくな」「弱いものをいじめるな」を柱とする郷中教育で薩摩の先人たちが最も嫌った「卑怯さ」が全面に出ている。

実は私は高校時代サッカー部に所属していました。6月の高校総体の予選で運良く1年生でただ一人出場させてもらっていたのです。試合が終了してスコアはドロー。勝負はPK戦にもつれ込みました。1年生だから順番は回ってこないだろうと思っていたところ、5人目でも決着がつかず、サドンデス方式(どちらかのチームが失敗するまで続ける方式)にまでもつれ込み、何と私まで回ってきてしまったのです。自分が何人目だったのかは記憶にありませんが、自分の蹴ったボールがゴールキーパーに弾かれた記憶は一生消えません。私の失敗により敗戦が決まったのです。高校総体終了と同時に3年生たちは引退です。つまり、私のPK失敗が3年生の引退を決定づけた形になったのです。試合後、号泣する3年生たち一人一人に私は、「すみませんでした」と謝りに行きました。私はその時、申し訳なさで一杯だったので、何を言われても我慢しようと覚悟していました。でも、返ってきた言葉は、「負けたのはお前のせいじゃないよ...」「サドンデスまでもつれさせた俺らが悪い...」「新チーム、任せたぞ」というような私を思いやる言葉ばかりだったのです。私はこのお陰で、その後気持ちよく、何の胸のつかえもなくサッカーを続けられたのです。そして、自分も仲間たちには先輩たちからされたのと同じように接するように心がけました。部活動から得られるものは、技術力の向上ばかりでなく、このような人との接し方も大きいと私は思っています。だからこそ、昨今の誹謗中傷が絶えない風潮には嫌気がさします。与論高校の皆さんにはポジティブな言葉や態度で世の中を変えていくような存在に成長してくれることを期待して止みません。